



兵庫で被災地会議

地域力、育成を

中越地震関係者が提言

十七日で阪神大震災から十二年となるのを機に、各地の地震や噴火の被災地からボランティアや研究者が集まる「被災地円卓会議」（関西学院大）が十三日、兵庫県西宮市の関西学院大

大災害復興制度研究所主催）が十三日、兵庫県西宮市の関西学院大で開かれ、中越地震の被災地からもボランティアらが現状と復興への課題を報告した。

（関連記事4・26面に）

神戸市、本県、三宅島などの被災地をはじめ、地震が起きた場合に大被害が予想される東京などから三十五人が出席。「脆弱な階層、脆弱な地域の復興支援」をテーマに、意見を交わした。

上村靖司・長岡技術科学大助教教授は「中越は脆弱と思われているが、災害時に助け合う地域の力が強い。過疎高齢化の中で、地域の力を弱めずに自立を促すような支援が大切だ」と指摘。稲垣文彦・中越復興市民会議事

務局長は「経済や人口などだけでは表せない『地域の豊かさ』を高められるように、今後も連携を進めたい」と話した。

神戸市からは「昨年は六十六人が公営住宅など

で独居死したが、自治会の活性化や高齢者の交流増加への取り組みが肝要」（黒田裕子・阪神高齢者・障害者支援ネットワーク理事長）などの報告があった。